

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

ashihara.emi@yki.jp

Vol.29 美しき五月に思う

風薫る五月。それは一年で最も美しい月だ。なにしろ、筆者の誕生月なのだから！

新緑がまぶしく、花が咲き乱れ、誰もがウキウキと外に出て、生きとし生けるものすべてが活気に満ちあふれる。そんななかで唯一どよ～んとしているのは、弁理士試験受験生ぐらい（でもないか？）。ゴールデンウィークでみんなが遊びまくっているなか、短答試験に向けて日夜勉強しなければならないんだから！

筆者は、合格した年の短答試験日のことが忘れられない。当時、筆者の母親は、心臓病で入院を繰り返していた。救急車を呼ぶことにも慣れてしまっているぐらいだったので、試験前日、考えた。

「もし、試験会場に向かう途中で、母が倒れて病院に運ばれたと連絡が入ったら、私は試験を受けに行くだろうか、母のもとに駆け付けるだろうか……」

確か、試験に行く決めていたと思う。「受験しに行ける」ということは、誰でも当たり前に行けることではないのだ。幸い、母に大事はなく、試験は終わった。

でも、その日は失敗したと思い、試験会場で号泣した。一人娘で、認知症だった父の介護も相まって、もう「次の年」はないと思っていた。仕事と両親のケアで精いっぱい、座って勉強できる時間もほとんどなく、答練も電車の中で立って書いていたぐらいだから、今にして思えば、最終合格できたのは、奇跡に近かった。

そして、翌年の5月13日「母の日」に、筆者の合格をあんなに喜んでくれた母は、逝ってしまった。自分に生を与えてくれた人がこの世からいなくなったということは、にわかには受け入れられなかった。

「魂」というものがあるんじゃないかと初めて思った。入院中だったこともあり、母の死を知らせていなかった父の容態はその日から悪化し、それからちょうど1カ月後、父もまた、大好きだった母のもとへと旅立ってしまったからだ。

母の日だったのに「お母さん、ありがとう」を言えてなかったように思う。だから、父の日が近づいたころ、父には「お父さん、ありがとう」と言った。

全身不随で意識もあるかどうか分からなかった父は、ひと筋の涙を流した。それが、我々の最後の「会話」となった。

両親の死から立ち直るにはかなりの時間がかかった。でも、本当につらい思いをしながら得た資格と仕事が救いになった。いろいろな態様で応援してくれた同僚や上司、友人、勉強仲間、先生がいてくれなければ、生き延びることはできなかった。

だから、筆者はその時の恩返しとして、苦しんでいる人が周りにいれば、手を差し伸べようと心に決めた。

筆者には姉弟がいたらしい。

でも彼らは生き残れなかった。母は、父は、どんな思いで、筆者の誕生・成長を見守ったのだろう。

五月になるとしみじみと思う。

この季節に、自分の始まりがあったのだと。そして、両親は同じ季節に去っていった。何

十年、一生懸命生きてきた命であっても、それは、必ず終わりを迎える。そのなんと儚いことか。

誕生日には、筆者を授かった時、そして、自分という存在が消えていく時の両親の気持ちを考えてみる。そして、あらためて思う。命は尊いものに違いない、と。

